神道教育研究における近代石門心学の位置づけ

――天地開闢解釈と皇室との関連――

中道豪一

はじめに

神道を教える・伝えることの研究を神道教育研究と言うならば、その先行研究の把握において河野省三の業績を欠かすことはできない。河野は「石門心学と神道思想」（『神道史の研究』中央公論社 昭和一九）、「心学と国体」（『心学』第六巻 雄山閣 昭和一七）、「心学と神道」（『心学』第四巻 雄山閣 昭和一七）等で石門心学の神道を広めた教育力を評価しており、ここに神道教育研究の対象として石門心学に注目する大きな理由がある。

また石門心学研究の大家 石川謙も『石門心学史の研究』（岩波書店 昭和一三）で開祖 石田梅岩の神道を重視する態度に触れるのみならず、慈音尼蒹霞・大島有隣など神道を重視した心学者について論及している。さらに道話の構成法について指摘した『心学道話精粋』や『教化の方法を話題として石門心学を語る』等の教育的考察もあることから、神道教育研究において石門心学を考察する意義は浅からぬものがある。

河野・石川の後、石門心学を神道教育との関わりにおいて研究した研究者に『近世神道教育史』（明治図書 昭和三七）を著した岸本芳雄が挙げられる。河野に師事した岸本は、心学の教育力を認める路線を継承しており、本稿はそうした先行業績の延長線上に位置する。

そこで本稿は、河野・石川・岸本らの研究成果を踏まえ、比較的触れられることの少なかった近代に注目し、神道教育研究における石門心学の価値を論じることを目的とした。その考察として参前舎の川尻寶岑・山田敬斎に焦点を絞り、現代に連なることを提起する天地開闢という神道表現が継承されていること、皇室との関わりという神道教育素材として貴重な実績を残したことを指摘した。

一　近現代を対象とする石門心学研究と本稿の視点

石門心学は近世において誕生・隆盛した学派である。享保一四（一七二九）に京都で産声をあげた石田梅岩の教説は、開教わずか五十年を経た天明・寛政期には石田梅岩流の心学、すなわち石門心学として六〇数ヶ国へ普及するに至る。その普及ぶりは庶民にとどまらず、旗本大名や公卿殿上人といった上層階級にまで至り、特に諸侯が自身で心学を修める例は六五藩九五名にも上った。さらに心学を藩士修養・領民教化に用いた藩は七一にも及ぶというから、その盛況ぶりは刮目に値する。最盛期、そうした活動拠点となった講舎は四六カ国に一八〇舎、断書を受けた者は三万六千人を数えたというから、石門心学を単なる町人の雑多な哲学・卑近な倫理活動と理解するのは正しくない。(1)その評価において消極的なものもあるが、その教育実績は否めない事実である。(2)

ではこうした石門心学は、近代を経てどうなったのであろうか。石川謙は天保以降の石門心学を「絶望的な衰退の路」をたどったと表現しているが、自身の研究・実践を含めた昭和心学をも考察対象に含めるならば、その一語でまとめるには心苦しいものがある。(3)とはいえ明治初頭から石川の活躍に至るまで、大勢において衰退という指摘は的を射ているといえよう。なぜならば心学の活動拠点である講舎が、明治を迎える頃には数えるほどに減少しているからである。(4)

石川は講舎減少を踏まえた上で、神道大成教に編入されつつも再興復活を果たせなかった衰退例を挙げると共に、明治一六年に谷干城の発起による道話再興の企てがあったこと、同四一年に高崎正風の主唱による教育勅語を心学精神から説くことを目的とした一徳会の結成があったことなど、心学が社会的脚光を浴びた事例を挙げている。(5)こうした事例から講舎活動視点ではなく、社会活動視点から心学再生の姿を見ることも可能であろうが、活動源である講舎や心学者が次々に廃舎・物故し、活動基盤が失われていく状況を見逃してはならない。かつて京都明倫舎・江戸参前舎と並び修行免状を出すことを許され、教学内容においても牽引役を担った広島も例に漏れず、宮本愚翁を殿として昭和に脚光を浴びるまで眠りの状態に入る。(6)道話の名手柴田鳩翁の末裔であり『石門心学の研究』の著者である柴田実も、『心学』の中で「九　心学の衰微―幕末から明治へ」という項を作っており衰退に向かう心学の姿を指摘している。(7)

衰退の根拠である講舎数だが、柴田実の父であり心学の

総本山たる京都明倫舎の継承者である柴田謙堂（寅三郎）によって、その明確な数字を知ることができる。柴田によると百数十あった講舎が、大正末年には明倫舎・修正舎（京都）、参前舎（東京）、明誠舎（大阪）、修敬舎（和歌山）、敬信舎（広島）など十指に数えるまでに減少してしまったという。[8] 時代を下って、昭和一七年に雄山閣から出版された、叢書『心学　第三巻』に所載されている高村光次「心学活動の現状」では、現存講舎が明倫舎・修正舎（京都）、参前舎（東京）、明誠舎（大阪）、恭倹舎（埼玉）の五舎にまで衰退したことが分かる。[9] 大正から昭和にかけて心学は一時活況の様相を呈するが、講舎数を基に近世と比較する限りにおいて、近代心学の教勢は衰退の流れにあると結論づけられよう。

近年における近代石門心学に関わる業績としては、三宅守常や仁木良和の論考が挙げられる。三宅は石門心学会の運営にも関わる研究者であり、その成果として「明治期心学の一側面―神道大成教にみる心学の影響―」（『こころ』第二九巻第一号 昭和四一）、「明治心学と宗教行政 ―附、史料『心学社中教導職拝命一覧』―」（『明治聖徳記念学会紀要』復刊第一〇号 平成五）、石門心学と報徳仕法を修めた鈴木良平を扱った「鈴木良平の精神生活考」（『近代日本における倫理教育の研究』日本大学教育制度研究所 平成一二）、さらには『三条教則衍義書資料集（上）（下）』（明治聖徳記念学会 平成一九）における心学者の分析がある。仁木は尊徳仕法研究の中で心学に触れており、その成果として北駿地方の住民たちが石門心学から報徳仕法へ転換を遂げた跡を明らかにした「北駿地方の心学について」（逆井孝仁教授還暦記念会編『日本近代化の思想と展開』昭和六三）や、北駿の具体的人物である小林平兵衛を扱った「報徳思想の受容について―小林平兵衛を事例として―」（『立教経済学研究』第四七巻第二号 平成五）などを挙げられる。これらも総じて心学衰退を裏付ける性格を持った成果と言えよう。

三上参次が石川の『石門心学史の研究』序文で挙げた足立栗園、横山健堂、白石正邦、河野省三といった心学研究者の他に田中義能、岩内誠一、柴田実、竹中靖一、ロバート・N・ベラーらを挙げることができるが、彼らの研究対象は主に全盛期たる近世である。[10] 明治以降の考察は、こうした研究者の生きた時代と重なることもあり、その全体像を俯瞰する段階に至っておらず、近年においてもその教学内容に対する考察・評価が成されていないのが現状である。本稿はそうした状況を踏まえ、具体的人物像と言説を明らかにすることで、神道教育に関わる部分の抽出を試みたい。

二　石門心学における神道について

入澤宗壽は心学と神道の関係を「心学神道」という名称で表現したが、神道研究の中でも特に教育的見地から心学に注目した先行研究としては河野省三・岸本芳雄の業績を筆頭に挙げなければならない。[11] 河野は「石門心学と神道思想」において、石門心学には神道思想の表現が「一　神祇の託宣　二　七福神　三正直の徳」によって表現されている傾向を指摘する。[12] また岸本は、『近世神道教育史』において、神道を重視した具体的人物として石田梅岩、手島堵庵、慈音尼蒹霞、布施松翁の教説を紹介してその分析を試み、「石門心学と神道」（『こころ』六八・六九号　昭和四〇年）では脇坂義堂における神道者鈴木以敬の影響を指摘している。[13] 本項ではそうした心学における神道を分析した上で、その教説から天地開闢に関する考察を特に取り上げ、考察を展開させていきたい。

石門心学における神道の重要性は、しばしば開祖である石田梅岩を通して説かれることが多い。その典拠として挙げられるのが、梅岩が二三歳の時に神道を説弘めようという志を持っていたこと、神儒仏を尊重するといえども神道を最重要とする必要があるという主張である。[14] 特に神儒仏の中で何を至極とするかという質問に対して、「天照太神宮」であると答え、さらには儒仏においても「太神宮」は最重要であるとの回答は注意すべき箇所であろう。[15] またこうした神道重視の姿勢は単なる言説上のものではなく、梅岩日常に息づくものであったことも忘れてはならない。[16] このように梅岩が、神道を重要視していたことは石川の他にも柴田実「石田梅岩と神道」（『神道学』一四号　昭和三二年）や多田顕「石田梅岩と神道」（『こころ』一一六号　昭和五三年）、「梅岩の教学と神道」（古田紹欽・今井淳編『石田梅岩の思想』ぺりかん社　昭和五四）、田中義能『心学概説』（日本学術研究会　昭和七年）をはじめ広く指摘されているところである。

しかしこうした開祖梅岩による神道重視の姿勢が、それ以後続く石門心学においても保証されるものであったかというと、そこには一考の余地が存する。なぜならば石門心学は、神儒仏といった教えのいずれかを説くことや、それらを混合させた教えを説くこと自体が根本目的ではなく、諸教の深奥に息づく存在を見出し、その体験に基いて日常を過ごすことを目的とするからである。よって、神道を重視しない心学者があったとしても、それをもって直ちに心学者として失格であるとか、開祖梅岩をないがしろにしているなどと断言できないのである。梅岩が『都鄙問答』で説くように、究極目的は「性」（後に手島堵庵によって「本心」とも言い換えられる）を知ることにある。よって「性」

を知る過程において、ある者は朱子学であり、ある者は日蓮宗であったり浄土真宗であったり臨済宗であったりするわけで、神道でなければならないといった規約も制限も存在しないのである。ただし「性」を知った梅岩が神道を尊重し、その重要性を強調したのであるから、後続の門下生においてもそれが修行結果として求められるべきものであるとの主張も当然考えられねばならない。しかし、その点は教学に入り込みすぎるので稿を改めて論じたい。つまりここでは神道を重んじた開祖梅岩があり、その後続の心学者にも神道を重んじた者がおり、その事績を神道教育研究の対象とすることを確認しておきたい。

梅岩の神道重視が必ずしも心学者全体の神道信仰を規制せず、また教学上における神道色を保証するものでもなければ、次に必要な考察過程は梅岩以降に神道を重視した心学者の分析であろう。慈音尼兼霞は『道得問答』において、自分の伝える教えは人より伝わったのではなく、天照皇大神宮よりの直伝であると説き、近藤平格の著書にも神道的主張が見られるが、神道に関わる代表的人物としては大島有隣を挙げるのが適当であろう。[17]『心学信徳録』で神儒仏が元来の源は一つであると説き、そのうえで「人ハ天が下の神物なり、心ハ則神明の本の主たり、神ハ信也、身は社なり、されバ身を修るを以て本となす」と教えを展開させているのみならず、『心学初入手引草』『心学信徳録』の随所に神道の教えが多用されているからである。[18]

有隣は中沢道二の弟子であり、江戸に盍簪舎を設立した心学者である。その活躍時期である文化・文政期は石門心学にとって教義・学説の対立期であり、有隣自身も京都の上河淇水と対立しているが、石川によると、こうした状況から神道重視の姿勢が生まれてきたと言うのだ。[19]有隣は教説のうえで梅岩の「形に由る心」を否定し、道心に対立する人心という二元対立を仮想、人心を克服するところに道徳の意味を見出した。そして、朱子学の立場から、そうした二元対立を克服する際に神道重視の姿勢が導き出されたと指摘する。具体的な対立克服にあたっては、「信」という概念を中心とした神道説が展開されており、頻繁に用いられる「神は信也身は社なり」という言葉がそれを裏付けると言えよう。

「信」の働きについていま少し詳しく見てみよう。ここでいう人心とは人間本来の状態を阻害する感情であるから、「信」によってそれを克服する必要がある。ではどうやって克服するのであるか。石川によると有隣は、その糸口として国家機構の本質を、人間本来の状態の現れである「信」の働きによって把握させたという。すなわち国家機構の構成要素である倫理と政治・祭と政治が「信」によって一致

し、機能させられている姿を把握させたのである。これは「信」を個人の内面問題にとどめるのではなく、眼目で機能する社会機構に息づく姿を指摘することで、人があらゆるものとつながっていることに気付かせる働きがあったと思われる。よって有隣の言説は必然的に、個人から日本という社会機構を経由し、その根源に遡ることで神国観念・神道が強調される結果となるのである。そして皇室への感恩奉公と生命が、永遠に発展すると力説するまでに至るのであるから、石川が有隣の皇室への言説を、有隣以前にこれほど説いた者はいないと評するのも頷けよう。(20)

梅岩と有隣の神道観を踏まえてきたが、ここで具体的な神道論として天地開闢に対する解釈を取り上げてみたい。天地開闢とは『古事記』『日本書紀』の冒頭箇所であり、梅岩以降の心学者も道話などで取り上げている題である。梅岩における天地開闢解釈は『都鄙問答』の巻末部分となる「或人天地開闢ノ説ヲ譏ノ段」に見ることができる。この箇所は天地開闢を怪しい説だと攻撃する者との対話を掲載したものだが、ここで注目すべきは梅岩が否定論者にむかい、天地開闢とは古今を通じて変わらない存在であると反論している点である。どういうことかと言うと、天地開闢は不可視的存在である「理」が現実世界に現れて万物となり、具体化する発展する過程を説いたものというのだ。(21)

それは梅岩が、人間の生命が形成されていく過程を、天地開闢の説が示す内実である「理」を備えている具体例として挙げていることからも、梅岩が天地開闢を単なる神話伝説ではなく、眼前における生物の発生・発育に見ることができる現象だと理解していることが分かる。現代用語に換言すれば、法則に近い意味で把握していると言えるのではなかろうか。

こうした天地開闢が意味するものを理解することで、梅岩は古典に出てくる聖人の意味や、「神聖ソノ中ニ生マス、国常立尊ト号ス」といった神書の奥深い内容がわかると言う。そして『都鄙問答』の最後は、そうした境地に到達してこそ、天の与える楽しみを得て真実の道に入ることができると締めくくられているのである。(22)

ここで注意せねばならないのが、こうした理解が神道を蔑ろにしたものではないという点である。梅岩において、この理解と信仰が共生している構造を忘れてはならない。梅岩が天照大神・国常立尊を崇拝しているというのは文献上の事実である。神道は野蛮・幼稚な伝説であり、儒教の亜種亜流であるから儒教用語を用いて神道を説明せねばならないといった理解とは一線を画していることを押えておきたい。

さて、こうした梅岩の神道観が、後続心学者に継承され

たかは定かではないが、天地開闢についての理解は大島有隣に継承されていることは『心学問答』（埼玉県立文書館所蔵）の「問　天地開闢とは如何　答　只今」という記述からも理解できる。細かい部分は窺えないが、本質理解において一致していることは重要なポイントである。

心学者の神道説を摘出していけば、三種神器になぞらえて徳を説くなどの技法的問題なども挙げることができるが、ここでは古典の記述を現代の事として把握する天地開闢の解釈と、現実に存在する皇室を尊重する態度へとつなげる点を神道教育研究における石門心学の意義として指摘しておきたい。

三　川尻寶岑について

ではそうした中、研究対象として挙げたいのが、参前舎の第十代舎主川尻宝琴と同十二代舎主山田敬斎である。[23] それはその教えの中に、先述したような神道の姿を認めることができるからである。

しかし先述した通り心学の本領は、人間本来の状態である「性」「本心」に立ち返ることで自分自身を修養し日常生活を送ることにあり、そのアプローチ方法は心学者の資質によって多種多様である。そもそも二人が属した参前舎は、石門心学中興の祖　中沢道二が江戸に開設した講舎であり、道二本人については仏教色が濃い。石川によると、道二は熱心な日蓮宗信者の父母に育てられ、その結果年若くして一天四海皆帰妙法の語句に注目したという。さらにその後発生した信仰上の悩みを参禅によって解決したのであるから、なおさらである。その証拠に「妙法」は『道二翁道話』の随所で説かれ、その思考展開法に禅宗の色が見えることからも日蓮宗のみならず禅宗の影響を指摘できる。[24]

禅について言えば、川尻が鎌倉円覚寺の今北洪川のもとで修行した結果、心学修行の静坐に臨済禅を取り入れたように、時代を経るに従い参前舎における禅の色彩は濃くなっている。[25] 川尻自身も忘路庵という禅者としての号を有するのみならず、著書『坐禅之捷径』（すみや書店　明治三七年）は現在においても臨済系の在家向け入門書として評価を受けている程である。[26]

ではそうした中、川尻に如何なる神道との関わりを確認できるのか。その考察の端緒として経歴・生業を確認しておかねばならない。何故ならばそもそも心学者は、基本的に生業を持ちつつ心学を修める形が一般的だからである。生活に活かすことを重視するためか、仏教における出家のような形態をとらない。よって本心発明にいたるまで、またはその後の実践修行の考察においても社会的経歴が大き

な筋道になっているのである。よって川尻が神道を強調するのも、道二が悩みを参禅によって解決したように、社会生活上において何らかの因果関係が認められると考えられるのである。

川尻は本名を義佑といい、天保一三年一二月一八日に江戸 日本橋 通油町で生まれている。[27] 生家は鼈甲問屋であり、八代川尻彦兵衛を相続しているが、寶岑の名を高めたのは鼈甲問屋としての顔よりも、むしろ歌舞伎作者としての一面であった。特に九代目市川団十郎と親しく、歌舞伎新作『新開場梅田神垣』『文覚上人勧進帳』など多くの脚本を執筆している。こうした大衆演劇に関わった経歴は、かつて道話の名手と呼ばれた柴田鳩翁が、講談を業としていたことを彷彿とさせるものがあるが、この経歴は川尻が道話の名手として活躍した一因として納得できるものであろう。それは『参前舎』（心学参前舎 平成二年）が、その巧妙さを中沢道二以来とまで賞している程である。

また心学に関わる要素として注意するものが、神道禊教との関連である。禊教入門は文久元年 二十歳頃であるが、その時代の話は詳しく分かっていない。しかし大正五年に出された『教育勅語戊申詔書道話』が身禊本院から出版されていることからも、何らかの関係が継続・または再構築されていたと思われる。禊教に所属した翌年、文久二年には石門心学に入門しているから、禊教との関連は注目すべき問題である。また歌舞伎の『新開場梅田神垣』が禊教開祖井上正鐵に関連することも興味深い事例である。

川尻については早野元光『川尻先生事蹟』（参前舎 明治四四）をはじめ、雑誌『心学道話』などに様々なエピソードが伝わっている他、その歴史劇の一部は『明治史劇集明治文学全集八五』（筑摩書房 昭和四一）で触れることができる。それらから神道に近しい環境と、そこから得た素養を表現する能力を有していたことを認めることができるのである。次にその教えにおける神道の姿を、実際に挙げてみたい。

まず現代においても過去が息づいているという天地開闢の教説を示しているのが、明治四二年三月一三日に鳥取県師範学校においてなされた道話「道徳の起源」（『川尻寶岑先生道話』武林書店 明治四二年）である。

其処で道徳なるものは天地と其体を同じくして、起源と云ふものはある筈のものでない。天地には宇宙の起原と云ふものは決してない。**天地開闢以来何年と云ふ事は申しまするが、宇宙の真理の起源と云ふものは決してない。起原のないのが即ち起原である。**神武天皇紀元以前ズット〳〵の神代の大昔の天の御中主の御神代が元と〳〵天地の根源、世界の根源であつて、仏道

で云ふ無始即ち始め無しとも云ふも同じ事で、道徳には天地と共に起原のないものである。**大昔の天の御中主の御神代と申するのも明治四十二年の今日の今が、今御互の目の前に生きてドシ〳〵働いてあらせらるゝ皆様の法心も同じ事で「神代とて経りし昔の事ならず今も神代と知る人ぞ神」とは此の事を云つたもので御坐りまする。**（三〜四頁　※句読点を加えた）

ここでは天地開闢で説かれた内容が、天御中主神の御神代が明治四二年にも働いているという言葉に表現されていることがかわる。しかしそもそもこうした解釈は、北畠親房が『神皇正統記』で「天地の始めは今日がなす」と述べているように石門心学が嚆矢ではない。その意味において伊勢神道の系譜を継いでいるともいえるが、その神道論を復古神道などの立場から吟味すると反論の余地を残す箇所でもある。例えば川尻は『忠孝道話』において、神というものは精神や真理と別ものではないと説く。[28] これは神を神社や祭祀空間に存在する超人間的なものと理解・信仰する者にとって、違和感を持つ表現であろう。しかし、これはどちらが正しいと断じるというよりも、神道への接し方をめぐる事例であると考えられる。梅岩も川尻も石門心学を修めたからといって神を蔑ろにするような行為をとってはいない。つまり神という存在を認めるところまでは共通だが、その先の目的・方法論が異なっているのである。石門心学から見れば本質は心の修養であって、神道も仏教も儒教も本質を磨く磨草であった。しかし神道側から見れば、神道という枠中で信仰や学理を培っているわけである。特に復古神道において仏教や儒教は温度差こそあれ全肯定される存在ではなかった。よって神道を心の磨草とする立場は認められようが、儒教・仏教と同列の存在として扱う姿勢に至っては到底納得のいくものではなかったと思われる。例え神道と心学の説く目標が一致したとしても、方法論が異なることは理解する必要があろう。こうした点を確認した上で、川尻の神道観をいま少し追ってみたい。

此の勅語は。明治二十三年十月三十日に。日本全国の臣民へ下賜在らせられたもので有るが。其の御趣意に在ては。今日新たに御創製し給へりしものでは無い。遠い神代の古へに在て。天ノ神の（天神と申すは今世間に云う天帝とか申す想像の神とは別也）御神慮に御定め在らせられて有る処のもので。其の本源は。正しく天地開闢以前よりして。宇宙間に主宰し在ます　**天之御中主ノ神の御神慮**で有るので。此の神慮といふことを。今日の学理上の名称を仮りて換言すれば。**宇宙の真理**といふに当るので有る。今此の勅語は其の本　**皇祖天照大神が。天之御中主ノ神と御同霊御同体の御真体の。**

大御口より詔らせられた御趣旨で。天地の真理。人生の常則である。（中略）

天之御中主ノ神の御真体で。**人身に受けて之れを本心と云う**。人には必ず私智妄見の迷ひが有る故。之れに簡んで本の字を添へて。本心と云ふ。此の心体。有にも非ず無にも非す。而かも天地の真理を具して。霊妙不測な働きを発す。其の体を云うときは　**天之御中主ノ神の御真体と。一味平等**で有るので。其の宇宙に主宰しまします御本体に就て「大元ノ神」と申し人身に賦与せられたる処に就て。**分霊と云ひ本心**と云ふ。

（一～三頁『教育に関する勅語謹話』心学参前舎　昭和一五）

ここに二つの注目すべき点が見られる。それは本心を天御中主ノ神と同一であり、本心はそこから派生したものであると説かれている点と、教育勅語の内実は天御中主神から天照大神を経て天皇の口より発せられたと理解している点である。まず梅岩も有隣も、共に国常立尊を根本神と位置づけているが、川尻においては天御中主神を根本神と位置づけている。これは禊教や神道大成教の影響も考え合わせるべき一つのポイントである。方法論の異なる神道への依存しない適度な接近が見られるからである。

また教育勅語の位置づけだが、これは明らかに当時の世相を反映した説き方である。中沢道二が幕府によって出される高札を話題として人心改善活動を行ったように、その時その場所に適した題材を用いるのは心学のお家芸である。しかしこれをもって川尻の心学を権力の走狗、または神道への一時的擦寄りと把握するのは些か問題がある。明治初期の宗教行政において石門心学は宗教行政上、神道組織への参入を余儀なくされたが、明治二〇～三〇年代にかけて従来の活動へ回帰を始める。そしてそもそも川尻の神道観が、梅岩や有隣の延長線上にあること、さらに道二に見られるように公の教材話材をとる先例もあることからも、川尻のそれは心学の伝統の上に成り立つと考えられるからである。以上、川尻の天地開闢理解を論じた。

四　山田敬斎について

次に挙げる山田敬斎は、参前舎第一二代舎主であり昭和心学の隆盛を支えた一人である。[30] 特に石門心学研究者である石川と二人三脚で、心学を広めるため全国を駆け回った功績は心学史上特記すべきことである。実践面における功績も大きいが研究への貢献もまた大きく、それまで文献整理がなされていなかった参前舎において史料を整えたのも山田である。[31] また日本学士院から恩賜賞を受けた石川の大著『石門心学史の研究』も山田の支えなくして語れない。[32]

明治以降衰退の道を歩まざるを得なかった心学を、再び

日のあたる場所に出した功を山田一人に集約するわけにはいかないが、心学継承者としての役割は決して過小評価すべきではない。例えば全盛期には京都明倫舎による支配体制が敷かれていたが、明治から大正にかけての統制は往時と比較にならないほど衰えていた。昭和三二年から『こころ』に掲載された「回顧四十年」の第一回原稿によると、四十年前すなわち大正年間は、東京・京都・大阪はそれぞれ教化活動を行っていたものの、統制はまるでとれていなかったという。そうした状況が転回したのが、大正七年三月に山田が明倫舎の柴田謙堂を訪問して以来だというから、ここに山田の歴史的役割を確認できる。

次にこうした連携が結実し、全国的統制下に心学各舎が結集しようとした最初の企画が、昭和五年十一月に行われた心学開講二百年記念祭だった。ここには石川を見出した下村寿一らの存在も大きいが、ここにも学術の世界と連携がとれるまで心学界を支えた成果を指摘することができよう。

このように行政の後押しもあり山田は活発な活動を展開した。東京・京都にとどまらない全国規模の道話・講演活動は、主要心学者とも比肩しよう。ではこうした山田において天地開闢の解釈は如何なる形で為されているのか。参前舎発行『心学』の第七九号（社団法人心学参前舎　昭和一四年）を見てみたい。

さて天地の開けぬ先と申しますと、清める物は上つて天となり濁れる物は下つて地となる。その天地未分以前じゃが、「神代とてふりし昔のことならず　いまも神代とする人ぞ神」で**即今この場がその儘神代といふも差支はない。**

我が日本の国体は吾人共に知る如く我が皇国は神様の御開遊ばされた国であつて、皇祖天照大神の神慮に依つて　皇孫瓊々杵尊が降臨在し〳〵て、地神五代を経て（中略）**それ故この日本は　天皇の御国、全国の民草は悉く皆　天皇の御物であるのが即ち日本の国柄**であります。

さて天照大神と申上げ奉るは、お生れ遊ばされた時「此子光華明彩シク六合ノ内ニ照徹セリ」とありまして**皇太神の御神体は天地と同体、宇宙の真理そのもの**であらせられる。それ故その大御心が天の天蓋地の地蓋まで照り徹つて在らせられるので、かの人身を受けて所謂生知安行の聖人や、久遠実成の仏等が、生れて後修行して天地同根の身心を獲得したのと違つて**お生まれ立ちよりそのまゝ天地同体真理の全体で在らせられるので、是こそ世界万邦無比の一種尊厳なる国体の成立する原因**であります。（※一部「」を付加した）

ここでは天地開闢以前の話が出ているが、結論として「即今この場がその儘神代といふも差支はない」とあるように、梅岩以降の天地開闢と同様の解釈が確認できる。この他にも天御中主神を天命と同質のものとして天・明徳・仏・真如と並び挙げているところが神道的である。

しかし注意せねばならないのは、梅岩や有隣に較べて山田が説く神道の割合は決して多いとは言えないことである。[33] 山田は浄土真宗の暁烏敏・南条文雄の説教を頻りに聞いていたようだが、宮本愚翁のように浄土真宗信仰を表面に打ち出したような表現は見えず、伝統的な儒教・禅色が強い。そうしてみると山田は別段神道を忌避した訳ではないが、神道教育研究の対象にするに不適当との意見もあろう。だがここで山田を扱うのは、そうした文字上の教育作用だけではなく、さらに大きな教育作用を認めることができるからである。結論から言えば、皇室との関係を築いたことにある。さらに正確に表現するならば、そうした関係が醸成された時期に参前舎という心学組織で活躍したことにある。山田にそうした意図があったか否か定かではないが、結果として石門心学が皇族の後援を得ることができた功績は極めて大きい。何故ならば一般通念としての偉大さに加え、梅岩・有隣らの皇室への崇敬心を現実のものとして結実させたからである。次項においてその詳細を論じたい。

五　皇室との関わり

では山田を挙げた理由ともいえる皇室との関係構築とは具体的に如何なるものかというと、それは昭和天皇の弟である高松宮宣仁との関わりに集約される。特に敗戦後の昭和二〇年九月に、高松宮が祖国復興は国民精神振起と道義高揚にあるとして、光臨閣に穂積重遠・下村寿一・石川謙・山田敬斎・田辺留蔵（肥洲）を招いたことは象徴的な出来事である。[34]

参前舎第一四代舎主　田辺肥洲によると、高松宮と心学の縁は、昭和五年頃に石川の研究を奨励したことに端を発するという。[35] 石川の進めていた石門心学の研究は帝国学士院の推薦を受け、昭和六年から有栖川宮奨学金を受けるのだが、その奨学金に高松宮が関わっていたのである。どういうことかと言うと有栖川宮は大正二年、有栖川宮第一〇代威仁親王の薨去によって断絶が確定する。高松宮家は、その後大正一三年に威仁親王妃慰子の薨後一年祭をもって、絶家した同宮の財産を継承したのである。そのような経緯から、昭和七年に石川を含む奨学金受給者五名が高松宮邸に参邸しているが、その際に高松宮妃喜久子の輿入れにあたって参前舎の有志が贈った、施印を張った屏風を持ち出しての質問があったという。石川が如何なる対応をしたか

分からないが、山田からその逸話を聞いていた石川は、帰路このことを山田に報告している。[36] 喜久子と心学の関係は後述するが、輿入れは昭和四年末のことであるから、静かに佇んでいた縁が、石川への奨学金を機縁に萌え上がったといえよう。よって高松宮と心学における関係は、このあたりの事情から萌芽していたといえそうである。

昭和五年は先述したように、心学開講二百年記念祭が執り行われた年であった。これは東京市立第一中学校講堂で行われたもので、文部省社会教育局局長 下村寿一が中心となって企画されたものである。下村は道義高揚のため、石川謙の心学研究を奨励したが、この祭典は石川をはじめ三上参次、参前舎からは早野柏蔭・山田敬斎らが参加、さらには宮内大臣・文部大臣が列席しており、心学へかけられた期待が垣間見える催しであった。

ではこれ以降昭和六二年二月の薨去まで、高松宮が如何に心学活動と関わったのか、その一端を見てみたい。まず戦後に光臨閣で、山田らを前に語った言葉は見逃し難い。

この終戦の思想混乱を救うものは心学の外にない。心学は新聞にも書けないことや、学校の先生が教壇の上から言えないことも、道話しながら、笑い話の中で道が話せるではないか[37]

この数年後、全国各地に石門心学会支部が発足するが、その発足集会には進んで足を運び講演を行っている。中でもかつて心学王国の姿を呈した広島において、石門心学の支部が発足した際の講演は、高松宮の考えが明確に見えている。

私達は抑々如何に生くべきであるか、また何を為すべきであるか。この極めて重要な人生の根本問題に対して、従来の多くの宗教なり、倫理なり、道徳なり、経済なりが何かしら対立矛盾を持っていたのを、心学は巧みに融合調和して、それ等を新しい庶民生活の中に生かしたのであります。そしてそれに拠って、心学は、滅びて行くところの古い社会道徳に代る人間生活の新しいモーラルを探求して、庶民階級の中に真の人間生活を指示し行こうと努力したのであります。

併し考えて見ますと、この心学を単に昔のままの姿で今日に再現して見たところで、それは心学の根本精神には合わず、いな心学の根本精神に反することは明らかであります。言い換えますと、心学の創始者達が二百年前に苦しみ、求め、そして新しい方向と態度とを示したように、今日の心学研究家は東洋の道徳・宗教、そして新しい方向と態度とを示したように、今日の心学研究家は東洋の道徳・宗教、その他心学が摂取しているものの外に、西洋の文明・文化の中からキリ

スト教の信仰を始めとして、倫理・哲学は勿論のこと、政治上においては新しい民主主義等を自由に摂取して、今日の民衆に浸透力の強い深い教えを探求することが望ましいのであります。私達の心学に望むところは、生きた真のモーラルを探求し、これを以て心学の内容を新に充実して、この地球上の人類の一集団であるところの我が日本の国民の視野を、十分に拡げて貰いたいということであります。心学は今日こういう大きな使命を持っているのではないかと私は思うのであります。(38)

高松宮のこうした思い、そして心学との関係は山田のみならず昭和の心学関係者が一丸となって形成されたと考えるべきであろうが、それらの形成過程は実に数奇な縁によって紡がれていることを指摘しておきたい。ここではその一例として皇室と心学との縁を指摘する。

例えば高松宮妃喜久子は早くから心学と縁があった。山田の師匠 早野柏蔭の師匠である川尻寶岑が、毎月小石川第六天町の徳川公爵家で、徳川美枝子に道話を行っていたからである。(39) なぜ喜久子がこれに関係するかというと、喜久子は実枝子の娘であり、喜久子自身もその席にあったからである。

特に注目すべきは徳川家に嫁いだ実枝子であろう。実枝子は有栖川宮熾仁の兄弟である有栖川宮威仁の娘である。その実枝子の娘である喜久子が有栖川宮の財産を継承した高松宮に嫁ぎ、先述した心学の縁を紡いだのである。有栖川宮から出た実枝子が、心学を治世の術とした徳川の末裔に嫁ぎ、その娘が有栖川の財産を継いだ高松宮に嫁ぎ、さらなる心学の縁を紡いだのである。有栖川宮家についても有栖川宮熾仁妃である董子は、心学を重用した松平定信幕閣 本多忠籌と系統が違うといえども、本多一族の出身であることを考えると趣深い。

また心学の後援者であった穂積重遠は、昭和一七～一八年ころ毎週二回、宮中で昭和天皇妃に『心学道の話』から抜萃したと思われるテキストを用いて御進講している。また昭和二〇年に東宮大夫となってからは、皇太子であった今上陛下に『鳩翁道話』を進講したというから、(40) 皇室と心学の関係は浅からぬものがある。

そもそも心学と皇室との関わりを遡れば、江戸期に道話の名手と呼ばれた柴田鳩翁にまで遡ることができる。鳩翁は文政一九年九月二五年に仁和寺一品法親王に四～五時間にわたって進講している。これは法親王の侍読十川小市郎が鳩翁の師匠であり、家臣杉本祐憲が同じ十川門下であり、心学同好の士であったことが原因であろうと石川は指摘しているが、(41) これは極めて重要な出来事である。

この他にも公卿の例もある。天保七年の三月、従二位土御門晴親への道話進講以来、毎月三の日に定日道話を継続、さらに同年六月から修行にとりかかり、九月には断書を受領するに至っている。晴親は、さらに断書受領後も修行を続け、天保一〇年四月に行われた梅岩百年際にも弟子の礼をとって参拝したという。[42] さらに参前舎第十一代舎主 早野柏蔭が宮内省に勤めていたことや、長沼譚月が本荘宗秀と交流の深かったこと等話題は尽きないため、ここでは様々な縁が結ばれていることを指摘するに止め詳細は稿を改めたい。[43]

戦後に山田は石川と共に、東宮太夫を務めた穂積重遠、大蔵大臣経験者の小倉正恒や、日本銀行総裁経験者の新木栄吉らと活動を共にする。そうした社会的地位からすれば山田の位置は決して高いものとはいえないが、石門心学の流れから見れば、山田は間違いなく皇室との関わりにおいて紐帯の役目を果たしたと言えよう。特に梅岩を起点に有隣を通して培われた皇室への思いを現実化した功績は大きいのではなかろうか。

六　おわりに

石門心学における神道理解を明確にするために、石田梅岩・大島有隣・川尻寶岑・山田敬斎における天地開闢理解の一貫性をもって、その具体的考察とした。天地開闢は単なる神話伝説ではなく、現代に活きるものであるとの理解は石門心学から抽出される神道教育内容として極めて意義深い。

さらに山田の時代に結実された皇室との関係も神道教育の重要な事例である。それは梅岩・有隣が説いてきた皇室を重んじる言説の延長線上に成立した関係自体、それが強い教育作用を有するというのみならず、心学関係者と皇族の間で紡がれた縁自体に神道教育の精髄が見られると考えられるからである。心学において体得すべき人間本来のあり方である「本心」は、別名「我なし」とも言われている。その「我なし」、いわゆる無私の状態で神道を説いた心学が、神道の核ともいえる皇室に結びついた事実は心ふるえるものがあろう。

教育は人の営みの中でも尊いものであるが、その後ろに神明の姿を見ることが出来てこその神道教育であると思われる。仮に神道・神を題材とするだけを神道教育と称するのであれば、神道を攻撃する教育もまた神道教育である。よってそこには神道教育としてのアイデンティティーがあって然るべきである。それはカリキュラム編成や社会的分析に基づく分類にとどまるだけではなく、精神性の指摘にまで至らねばならない。この指摘において、本稿で扱っ

た石門心学と皇室の事例は核心に迫るものがあると言えよう。

なおこのような原理的問題についても他日稿を改めるが、本稿はそうした考察をなす上で基本的素材となる神道教育事例を考察したということで筆を擱きたい。

注

（1）二三頁 石川謙『石門心学史の研究（第三刷）』岩波書店 昭和五〇

（2）二二四頁 東京大学史学会『日本史概観』山川出版 昭和二五

（3）八二一頁 石川『石門心学史の研究』

（4）七八一頁『国史大辞典 第七巻』（吉川弘文館 昭和六一）で石川の実子 石川松太郎も「明治初年にはいり、心学はいったん衰微の極となった」と記述している。

（5）八二一頁 石川『石門心学史の研究』

（6）石川には宮本愚翁の道話を再編集・校訂した『愚翁道話』（光風館 昭和一六年）がある。その付録として宮本の業績と、その父中村徳水についての業績がまとめられている。明治期に活躍した宮本愚翁について近年の研究として、西村晃『宮本愚翁日記抜粋・恩ほうし』（広島県立文書館 平成七）などが挙げられる。

（7）一五八～一八一頁 柴田実『心学』至文堂 昭和四二

（8）六五頁 柴田寅三郎『心学提要』社団法人心学修正舎 大正一五

（9）『心学 第三巻』雄山閣 昭和一七

（10）三上参次は石川『石門心学史の研究』の序文において、石門心学の特徴と近年の研究状況について述べている。また研究状況をまとめたものとして長谷川鉱平「心学研究の現状」（『心学 第七巻』雄山閣 昭和一七）や、三四～三六頁 山田敬斎『石門心学講話』（道義昂揚推進会 昭和二九）があり、外国人研究者や近世における心学評価をまとめたものとして石川『心学 江戸の庶民哲学』（日経新書 昭和三九）がある。

（11）入澤宗壽の論考は「心学神道について」（『丁酉倫理会倫理講演集』四八四輯 昭和一八）に見ることができる。入澤宗壽の神道論については拙稿「入澤宗壽の神道教育―神道教育の類型化への試み―」（『明治聖徳記念学会紀要』復刊第四五号 平成二〇）を参照。

（12）一六七頁「石門心学と神道思想」『神道史の研究』

（13）二七三～二八六頁「第二章 近世神道と心学」『近世神道教育史』

（14）六一三頁『石田先生事蹟』（柴田実編『石田梅岩全集 下巻 改訂再版』清水堂出版 昭和四七）にある記述。「先生廿三歳の時、京都へ登り、上京の商人何某の方へ奉公に在付給へり。はじめは神道をしたひ、志したまふは何とぞ神道を説弘むべし。若聞人なくば鈴を振り、町々を廻りて成とも人の人たる道を勧めたしと願ひ給へり」

（15）一四四頁『石田先生語録』（柴田編『石田梅岩全集 下』）「神儒仏三ツノ中ニテハ何レヲ至極恭シト尊バレ候ヤ」という質問に「依テ神儒仏共ニ尊ブニ礼ヲ以テスルニ次

第アリ」として第一に「天照皇太神宮ト拝スル中ニ八百万、天子、将軍モ籠リ玉フ」と回答している。

(16) 六二五～六二六頁『石田先生事蹟』（柴田編『石田梅岩全集 下』）「平生朝は未明に起給ひて、手洗し、戸を開き、家内掃除し、袴羽織を着し給ひ、手洗いし、あらたに燈を献じ、先　天照皇太神宮を拝し奉り、竈の神を拝し、故郷の氏神を拝し、大聖文宣王を拝し、弥陀釈迦仏を拝し、師を拝し、先祖父母等を拝し、それより食にむかひて、一々頂戴し、食し終りて口すすぎ、しばらく休息し、講釈をはじめ給へり。暮がたにも又さうじし、手水し、燈を献じ、朝のごとくに拝したまへり」

(17) 『道得問答』巻之三「我伝と言ふは、人より伝はるにあらず、我身を主宰したまふ天照皇大神宮より直伝なり」

(18) 九六頁『心学信徳録』（『心学―大島有隣・関口保宣―第一集』杉戸町教育委員会 昭和五九）において「和朝に神道といひ天竺に仏道といひ唐土に儒道といふ、三道の本源天より出て道ハ一なり、其実体人に備る、外に向ふて道を求るにあらず、只自心を明らかにする教なり」と三教の源が一つであることを述べている。なお「人ハ天が下～」は一〇九頁『同』から引用した。

(19) 一一二～一一七頁 石川『石門心学史の研究』に有隣についての考察が載っている。

(20) 一一七頁 石川『石門心学史の研究』

(21) 一七九～一八〇頁 柴田編『石田梅岩全集 上巻　改訂再版』（清水堂出版 昭和四七年）に「天地開闢ノ説、又天ハ子ニ闢クルノ説、是皆天地ハ自然ノ次第ナルコトヲ、知ラシメン為ナリト知ラルベシ」とあり「天ハ一、地ハ二、万物ハ三、天地有テ後ノ万物ナリ。人ハ万物ノ霊ナルユヘニ、万物ヲ人ニ惣合、三ニ生ルユヘニ、人ハ寅ニ生ズトモ云ベシ。又人母ノ胎内ニ宿ル時ハ一滴ノ水ナリ。是鶏ノ子ノ如クニシテ牙ヲ含リ。其中ニ清陽ナルモノ、虚ニシテ心トナルハ天ノ開ナリ。頭ノ形高ナルハ葦牙ノ如シトモ云ベシ。如是見ハ天地開闢ノ理ハ我一身ニモ具レリ。此ヲ味ヒ見バ天地ノ始終ハ古今共ニ同ジ」とあるのが根拠。

(22) 一八二頁『石田梅岩全集 下』に「汝モ一理ヲ明ラカニシ得ルナラバ、ソノ時ニコソ、『神聖ソノ中ニ生マス、国常立尊ト号ス』トノ玉フコト知覚シ、天ノ与フル楽ミヲ得テ、実ノ道ニ入ラルベシ」とあるのが根拠。またこの箇所をはじめ『都鄙問答』についての解説書としては、石川謙『石田梅岩と「都鄙問答」』（岩波新書 昭和五四）がある。

(23) ここでは川尻を十代舎主と記しているが、在世中川尻は舎主に就いていない。三宅が九六頁「明治心学と宗教行政」（『明治聖徳記念学会紀要』復刊 第一〇号）で指摘するように没後に贈られた称号である。本稿では、そうした事実を踏まえた上で、後世の記録に従い第十代舎主という名称を採ることとする。

(24) 五～六頁 石川『校訂 道二翁道話（第五刷）』（岩波書店 平成三）道二は罹病のなか、霊験は祈られる神仏にあるのか、祈る者の心中にあるのかという問題に突き当たる。それを解決したのは明和二年（一七六五）一一月、道二が四一歳の時分、東嶺禅師に接してからであるという。その後に霊元禅師にも接し悟境を透徹したとある。

(25) 一四頁　田辺肥洲「心の欲するところ―人格は一日にして成らず―」（『こころ』第二二号　社団法人石門心学会　昭和三二）に記載がある。また石川によると、幕末の心学者　松山寂庵の時代、衰退にむかう心学を蘇らせるために禅の修行を取り入れたことが指摘されており、明治以降の東京心学の禅宗化がここに萌芽していると指摘されている。（一三四頁　石川『石門心学史の研究』）また山田が指摘するように、参前舎に禅堂様式が取り入れたことも、禅への接近を示す証拠である。（三〇頁「回顧四十年（三）」『こころ』第二五号　昭和三二）

(26) ここに略歴を記しておく。川尻寶岑（天保一三年一二月一八日～明治四三年八月一〇日）名を義佑、宗静。幼名を永吉。号に有一松喬、忘路庵、擇木堂。家業は江戸時代から続く老舗鼈甲問屋で通称を炭屋彦兵衛・炭彦。一七歳の夏に父、四一歳の冬に母をなくす。子爵谷干城主催の心学道話会の要請に応じ、山岡鉄舟の大道社顧問、男爵高崎正風の一徳会の講師なども務めた。また演劇に深く通じ多くの脚本を残している。こうした記載は、橋本蘆風「東京近郊心学先賢墓地巡り（二）」（『心学』第七二号　社団法人心学参前舎　昭和一三）などに記されている。

(27) 花園大学学長を務めた大森曹玄『参禅入門』（春秋社　昭和三九）の序で臨済系の指導書として紹介されている。また臨済宗妙心寺派の運営する東京禅センターのホームページでは、現代語訳した本文を閲覧できる。

(28) 精神と真理と神様とは、決して別のものでは無い。唯精神と云ふ名前は人間の身体だけにつけた名目で、神様と云ひ真理と云ふは、一般につけた名目である。即ち、広いと狭いとの相違はあるが、一つのものでございます。（五八頁『忠孝道話』　籾山書店　大正元）

(29) 一一五頁　石川『石門心学史の研究』の記載が根拠。また有隣門下の近藤平格も神道色が強い心学者であった。こうした神道色の濃淡を示す図が、同書一一一頁に掲載されている。

(30) 山田の略歴は『こころ（敬斎　山田先生・追悼号）』（第六〇号　昭和三九）に詳しい。ここに略歴を記しておく。山田敬斎（明治二〇年三月七日～昭和三九年一月六日）山田は明治二〇年、東京市浅草区元鳥越町に生まれた。家は天明五年以来、百七十余年続いた老舗の質業。三歳の時に父を亡くして以来、母親が家業を守り山田を養育。大正六年に医師樫田十次郎のすすめで心学参前舎に入門、第十一代舎主である早野柏蔭に師事。大正十五年に石門心学の修行を了畢、禅門に入り昭和十年に大事を了畢する。同年の早野逝去にあたり参前舎第十二代舎主となる。

(31) 山田の跡を継いだ、参前舎第十三代舎主である伊豆山格堂は、『こころ』（第六〇号　昭和三九）で山田についての回想録を記しており、その中に史料収集に尽力したエピソードをはじめ様々な話が収録されている。

(32) 三頁　石川「道とするものへの忠誠」（『こころ』第二二号　昭和三二）山田が石川と関係を持ち始めたのは、昭和四年の十月ころといわれている。そこから約三十年間ほど二人三脚の交わりが続いているが、特に心学が庶民だけの学問でないと証明するきっかけとなった関口保宣文書は山田の仲介によるところが大きい。（三〇頁「回

(33) 顧四十年（五）」『こころ』第二八号 昭和三三）
二頁 山田「命に非るは莫し 順て其の正を受く」（『心学』第五三号 心学参前舎 昭和一一）

(34) 三七頁「山田敬斎先生の略歴と行績」（『こころ』第六〇号 昭和三九年）や、一一頁 山田「穂積重遠先生と心学会」（『こころ』第三八号 昭和三五）に詳しい。「穂積重遠先生と心学会」によると、九月二一日に下村・石川・山田・田辺が。穂積は公務のため、数日遅れて訪れている。

(35) 三～七頁 田辺肥洲「高松宮殿下のご逝去を悼む」（『心学道話』第九号 社団法人心学参前舎 昭和六二）

(36) 三二～三三頁 山田「回顧四十年（四）」（『こころ』二七号 昭和三三）

(37) 五頁 田辺「高松宮殿下のご逝去を悼む」（『心学道話』第九号 社団法人参前舎 昭和六二年）にある山田のメモが根拠。

(38) 二～三頁 高松宮宣仁「昭和心学の在り方」（『心学』第一号 社団法人石門心学会 昭和二四）

(39) 一五頁 田辺「心の欲するところ―人格は一日にして成らず―」（『こころ』第二二号 昭和三二）

(40) 一三頁 山田「穂積重遠先生と心学会」（『こころ』第三八号 昭和三五）

(41) 八三一～八三二頁 石川『石門心学史の研究』。引用は『よしなし言 上』（昭和四年版）の頁五二。「我等幼年より志願有之候処、はからず一品惣法務の宮様御前近く召され候事、誠に冥加に相かなひ申候。是ひとへに、古先生の御余徳と有がたく奉存候」。なお山田は『石門心学講話』の頁三三で「仁和寺宮は有栖川宮家でありまして」と述べているが、その関係はよくわからない。

(42) 八三一～八三二頁 石川『石門心学史の研究』。引用は『よしなし言 下』（昭和四年版）の頁一三二。天保七年の六月箇所は「六月、我等参殿いたし候処、心学御修行遊ばされ度よし、御直の御頼みに候故善導申上候」九月箇所は「土御門殿此節御発明遊ばされ候故、則ち堵庵先生断書献上いたし候。但し縉紳家石門へ御入学、此度権輿にて御座候」

(43) 真田芳雄「参前舎と本荘宗秀」（『心学道話』第一二号 昭和六三）

（神奈川大学学生生活支援部学生課）